

第二回

ポ・ホ

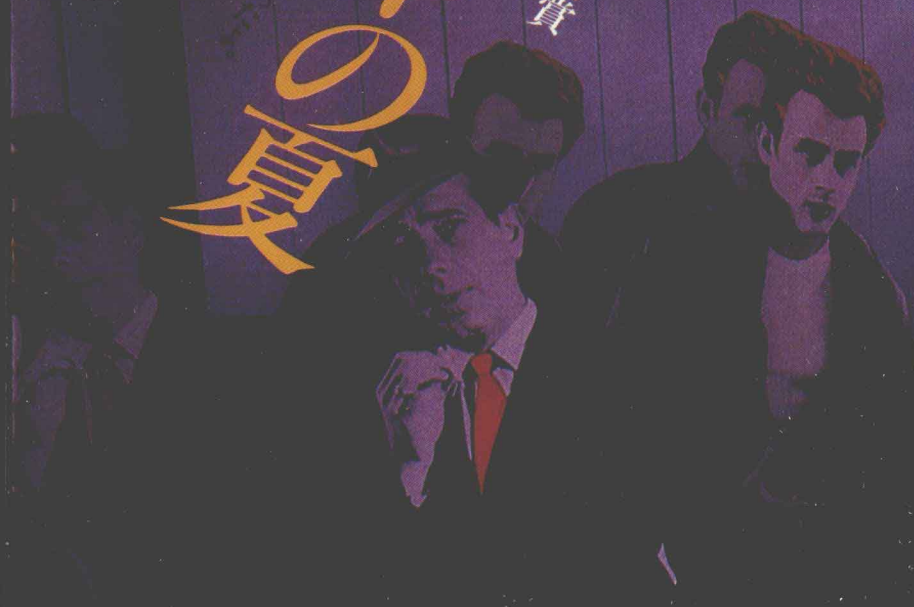
放送

青春

文学賞
受賞

セロロイドの夏

林野浩芳



第三回

セロイド

放送青春文学賞受賞

映画の夏の夜

夏の夜

浩芳

8 BENT
EIGHT

HYPER

第三回ニッポン放送青春文芸賞
受賞作品集

セルロイドの夏

昭和57年6月20日 1刷

定価 九八〇円

著者 林 野 浩 芳 他

編者 株式会社ニッポン放送

企画 エイトビート

発行所 株式会社サンケイ出版

東京都千代田区大手町一の七の二(〒100)

TEL(東京)二三一七一一(代)

大阪市北区梅田二の四の九(〒530)

TEL(大阪)三四三一一二二(代)

印刷 サンケイ総合印刷

製本 田 中 製 本

*万一、乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

第三回 ニッポン放送青春文芸賞受賞作品集

セルロイドの夏
目次

第三回ニッポン放送青春文芸賞

セルロイドの夏



林野浩芳

優秀賞

夏によろしく



森下いつみ

佳作

過ぎ去るだけでなく……

鳴瀬貴之

眠ればいい 中村早桐 ●

119

ピートノ町井登志夫 ●

153

選考経過 ●

184

第四回ニッポン放送青春文芸賞応募要項 ●

201

あとがき ●

204

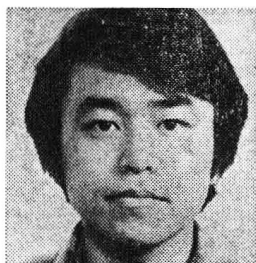
応募者全氏名 ●

207

第三回ニッポン放送青春文芸賞

セルロイドの夏

林野浩芳



23歳。埼玉県。

昭和56年、武蔵大学経済学部卒。同年、印刷会社入社、現在に至る。

「受賞のことば」受賞の電話を受けた時、とても嬉しかったが、反面、非常に照れ臭いなあ、という気がした。近頃、少しではあるけども、小説を書くという行為は自分だけのことであり、様々な人々に読ませたいと思うのは、本道にはずれているのではないか、という気持ちがしはじめていたからである。

学生時代は、皆、誰もがなぜ小説を書かないのか不思議だったが、社会に出て働き始めると、周囲は小説を書くことはおろか、読むことさえ必要としない、精神的にとっても豊かで健康的な方々ばかりで、もの凄いい文学青年がゾロゾロ周りではいまわって、薄暗い飲み屋や喫茶店で暗い話をしていたのとは全く別の世界だった。

僕自身は精神的な面であまり強くなく、というより人格がどこか破綻していて、社会とはギクシャクとした深い溝があるようで、その溝を多少なりとも埋めるために小説を書き始めた、という気がするのだが、「セルロイドの夏」は昔していたような無意味な深刻ぶりや、純文学青年のポーズをバサツと切り捨て、思いきり肩の力を抜いて、書きたいように書いた。だから顕彰されてとてもありがたい。新しいステップが踏み出せるのではないか、という気がする。

最後に、この何年か僕の書いたものを読んでくれ、適切なアドバイスや励ましを与えてくれた松家仁之君と、原千恵子さんに心の底から感謝したいと思う。どうも、どうも。

セルロイドの夏

林野浩芳

白い軍手が闇の中で浮びあがった。汗の臭いが薬品のかすかな臭いと混り合う。

僕の手の中に、七月の青い空がある。両手でフィルムを挟み、灯に透かす。僕の背中で、トヨイチがふうっと溜息を吐いた。どうだ。うまくいっているか。セキ込み、少しどもりながら聞く。だめだあ、真っ白だあ。赤くなきやいけないのによお。僕は答える。そうかあ。だめかあ。トヨイチが僕の掌からフィルムを奪い取り、同じように灯に透かしてみた。

太陽が、真っ白じゃねえか。トヨイチがあきれた声で言った。どうしちゃったんだろう。ほら、露出の失敗じゃねえか。額から汗が湧き出てくる。甘酸っぱい汗の臭いが苛立ちを高めた。首にかけたタオルで拭く。拭いても拭いても毛穴から水があふれた。現像液の強い臭いが不快だ。どうしようもねえなあ。トヨイチが僕の顔を覗き込むようにして言った。昼にいったい何を食ったのか、嫌な臭いがトヨイチの口元に漂っている。僕はトヨイチから逃るように、別のフィルムを取り出し、わずかな光に透かしてみる。指紋をつけぬようはめた軍手の中に、細長いフィルムが続く。ハミリのカラーフィルム。

暑さは、この薄暗い密室までも追ってきていた。僕はもうずっとパインのジュースのことばかり考えていたのだ。決してパック入りなどではない、紙コップに氷を沢山浮べたパインのジュース。どうしてパインなのか自分でもわからないが、あのべとつく嫌らしい甘

■

さが奇妙に今、喉元でなつかしさを感じさせていた。アート・スクールのちやちな受付に続く入口で、授業のあと、トヨイチや村さんや八重さん、燿子、明法たちと一緒に、よくジュースを飲んだ。小さな円卓に陣取り、淡い入口の螢光灯の下で本を読んだり、時には議論などもした。今、八重さんは僕の掌の中でアカンベエーをしている。どこで撮ったカットか、すぐには思い出せないが、とても華麗に映っている。暑い。よお、なあ。とぎれとぎれにパンツ一枚のトヨイチが叫ぶ。動くたびに、濡れた素肌が触れる。おれ、出るぜ、悪いけど。言って押入れのフスマをトヨイチが開けた。冬用のカーテンをひっぱり出し付けたのに、所々の隙間から七月の光が踊り込んできた。一気に眼の中に飛び込み、瞼の裏で太陽がコロコロと転がった。眼を押さえ、僕とトヨイチは押入れから這い出た。もうだめだあ。トヨイチは畳の上に仰向けにひっくりかえり、胸で呼吸する。微かに勃起しているのか、白いパンツが盛り上っている。僕は寝ているトヨイチをまたぎ、カーテンを開けた。幾万かの光の粒子が僕の皮膚で栗立った。遠い坂道のアスファルトに陽炎が立っている。窓を開け、窓辺に腰かけた。鉄のワクが錆びつき、ささくれ立っている。素肌の背中が痛い。おい、眼を開け。トヨイチが僕を呼んだ。ご同室のお方、珍しくいらっしやいませんねえ。僕はパラフィン氏愛用の電卓をもて遊びながら、首でもつりに行ったんじゃねえか、と言った。トヨイチは軽く含み笑いをした。

パラフィン氏は変わった男だ。理科大の数学科の学生なのだが、顔が青い、というより透き通るように白いので、寮生たちからパラフィン氏と呼ばれていた。パラフィン紙でなく、パラフィン氏だ。パラフィン氏が電卓から叩き出す数字は、一見何の意味も持たない。たとえば、

〈8604+1800〓10404〉

というようなたし算を繰り出す。変哲のない数字だが、これは、

〈8604+1800〓10404〉

ヤラセヨ イヤーン イレヨイレヨ

と読めることもできるのであるのだ。何がおもしろいのか、こういう具合にパラフィン氏は毎日電卓と格闘し、数字を作りあげていく。彼は別に誰かに見せるわけでもなく、当然何処かに発表するあてがあるわけでもない。ただ毎日、朝から晩まで、そうやって数字にいやらしい、それでいて滑稽な意味を持たせているのだった。僕はパラフィン氏が作りあげた数字の殆んどを見ている。

〈3460+1184+5647〓10291〉

サセロ イイワヨ ゴムシナ イレニクイ

〈568+718〓1286〉

■
ゴムワ？ ナイワ イレチャウ

などはパラフィン氏のレポート用紙を盗み見て印象が強く、覚えているのだが、実際にはどのくらい作っているのかわからない。

トヨイチは起きあがり、Tシャツを着た。顔が日に当たり、ウブ毛が金色に光っている。おまえ、早く扇風機ぐらい買えよ。暑くてしゃあねえや。言って尻に手を入れパンツのたるんだ部分を直した。現像液の臭いが押入れから洩れてくる。ああ。欠伸半分に僕は答え、押入れに顔をつっ込み、ビンのフタをし、フィルムをケースにしまった。おれ行くからさ。トヨイチは言った。今日は二時からなんだ。眩くように言い、腕時計をつける。

トヨイチは僕に何かを言っただけで欲しそうな顔をしたが、どんな言葉をかけたら良いかわからない。黙ってトヨイチは山盛りになった灰皿の中から比較的長い吸殻を引き抜き火をつけた。会合には少し遅れるかも知れないけど、必ず行くからよ。久しぶりのミーティングだもんな。脇の下から饅^すえた臭いが漂ってくる。トヨイチに見られないように脇毛をひっぱり、汗のついた指を鼻にもって行った。夏の臭いがした。おじやま、あとでな。サンダルを突っかけトヨイチは出て行った。どうせまた、何時間も退屈なアルバイトで時間を過すのだろう。

県寮の二階の部屋からは、なだらかな坂の末まで見通せる。アスファルトを跳ねるよう